

さまざまな選択—その2

夏休み、夏季特訓の暑い日々も終盤に入っていたある日、かわいい封筒に入った一通のお手紙が届きました。差出人を見ると、S君、2020年度の卒塾生です。「西村先生へ 残暑お見舞い申し上げます。立春とは言えまだまだ暑い日々が続きますがいかがお過ごしでしょうか？」そんなきちんとした時候の挨拶から始まったそのお手紙には、高校に入学してからのS君の楽しい毎日の様子が生き生きとしたためられていました。

中京大中京高校に通うS君。実は彼がこの高校に通うことになろうとは、3年の2学期も末になるまで、ご両親も私も思ってもみないことでした。2年の冬の全県模試の志望校カードには第一志望に豊田高専を書いていた彼。その時の通知表評定は35しかなくて、私は彼に言いました。「豊田高専は2年の3学期と3年の2学期の通知表の平均が内申点として使われるから、このままではかなり厳しいよ。平均で30後半は必要だから、3年生になる前の、この3学期からが勝負だよ。」と。ところが3学期、彼の取ってきた通知表は33・・・。豊田高専への道は閉ざされたかに思えました。ただ、それでも彼はあまり落ち込んでいる様子は見せず、やわらかくおっとりとした表情です。(どこまで本気なのかな?)と懸念したものでした。しかしながら3年の1学期、奮起したのでしょう。中間テスト、期末テストと抜群の成績を取ってきて、なんと通知表は40に。さらに夏季特訓で確実に実力もつけ、2年の冬の全県模試では豊田高専に対して72%しかなかった合格可能性も、3年の夏の全県模試では92%にまで上げました。「このまま2学期も通知表を上げていけば合格できる可能性もあるよ!」—そんな私の声かけにも相変わらずのおっとりとした表情は崩さず、彼から出てきた質問は、「この内申で中京大中京の推薦はもらえますか。」でした。「もらえるはずだよ。」と答えましたが、内心、何を言っているのだろうと不思議に感じただけで、この時私はあまり深くは気にしていませんでした。

彼の本当に目指しているものがわかったのは2学期の末です。「中京大中京に入って野球部のマネージャーになり、将来はドラゴンズの応援団に入りたい。」本気でした。幼い頃からの夢を、夢で終わらせないため、彼は自分の心に正直に向き合って、今本当に進みたい道に歩いて行こうとしたのです。応援団を続けながら自分の生計を立てていくのは生半可なことではありません。どんな仕事につけばいいのか、そのためには今から何をしたらいいのか、真面目に考えています。15歳の決意です。見た目からは想像できない強い芯を持っていたS君。自分で決めて自分でつかんだ高校生活です。輝かないわけがありませんね。将来の姿も本当に楽しみです!